



籠城にのみ勝算の花粉症

堀川明子

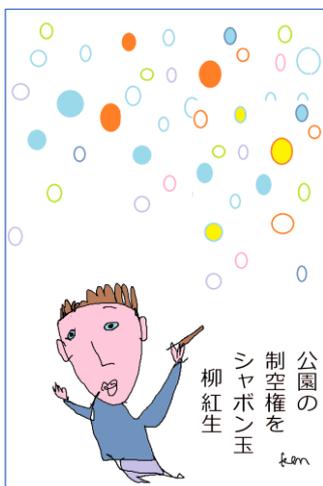
俳句は表現の独創性で輝く。この句では「籠城に勝算」である。つづめて言えば「花粉症にならない方法は外に出ないこと」を仰々しく表現。



冬の月触ればきつと冷たかる

吉川正紀子

俳句は「童の心」で詠めば佳句となる。「冬の月の色が白く冴えている」という表現なら単なる写生だが、冷たいだろうと感じて詩となった。



公園の制空権をシャボン玉

柳 紅生

「公園の空いつぱいにしゃぼん玉」と写生しただけだと、ありきたりである。しゃぼん玉を擬人化し、「制空権」の表現で佳句となった。



営巢のあいさつの糞初つばめ

荒井良明

巣造りをさせて下さいませ、とポトリと糞をした。昔から入居の挨拶に、これだけは欠かせないね。「挨拶」の上品に「糞」の下品で裏切りの構成。



耳たぶを擦りたがる春の風

稲葉純子

春の風を擬人化した。「くすぐる」という行為を「くすぐりたがる」と軽い表現にして明るい句となった。「耳たぶ」との組み合わせも良いね。



句作りの人生七分梅三分

赤瀬川至安

三分咲きの梅を観ていて、句作り人生ちょうど七分じゃわいと気が付いた。言葉遊びが句として成立した時、予想もせぬ深みあるものとなる。